慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	慶応義塾図書館蔵『十二類歌合之草子』解題・翻刻
Sub Title	慶應義塾図書館蔵『十二類歌合之草子』解題・翻刻
Author	石川, 透(Ishikawa, Tohru)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1995
Jtitle	三田國文 No.23 (1995. 12) ,p.38- 46
JaLC DOI	10.14991/002.19951200-0038
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19951200-0038

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶応義塾図書館蔵『十二類歌合之草子』解題・翻刻

石川　透

解題

ここに紹介する慶応義塾図書館蔵『十二類歌合之草子』は、「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」（『御伽草子の世界』）の「十二類絵巻」の項に、（一）の（ニ）系統として著録されている伝本である。しかし、本文を精査すると、（一）の（ロ）系統の［寛文］喜右衛門刊絵入大本二巻（内題「獣太平記」）に近いことがわかる。しかも、小異の箇所を検討すると、「獣太平記」を元に、奈良絵本に仕立て直したのではないかと思われる。寛文年間から元禄年間にかけて製作された、奈良絵本・絵巻には、当時の刊本を元にしたと思われる伝本が散見する。室町物語を研究する上では、奈良絵本製作における、元本の依拠の仕方や改変の仕方、さらには挿絵の作り方等を考える必要がある。本伝本は、挿絵が抜き取られているが、「十二類絵巻」の本文研究には益するであろう。ついでにいうならば、これと同じ（一）の（ニ）系統に著録される慶応義塾図書館蔵桝形一帖（歌合の条のみ）は、本文的には、（一）の（イ）系統の有名な堂本家蔵絵巻の本文に近く、形態的に同類（歌合の条のみ）の群書類従本とは別系統である。なお、目録類に著録されていないが、「十二類絵巻」「獣太平記」の参考文献には、青山忠一「『獣太平記』の研究」（『近世文学論攷　研究と資料』一九八五年）がある。

本書の書誌は、以下の通りである。

所蔵、慶応義塾図書館（二二〇－一九八－一）
形態、元奈良絵本、合一帖（元上下二帖）
時代、［江戸前期］写
寸法、縦二二・九糎、横一六・七糎
表紙、紺地草花模様
外題、左上後補題簽「十二類歌合之草子」（本文別筆）
内題、ナシ
料紙、下絵入り斐紙
行数、半葉一〇行
字高、約一八糎
丁数、三二丁（元上一八丁、下一四丁）、内二丁欠
挿絵、上六頁、下七頁、以上全て欠
奥書、ナシ

印記、見返し朱印「アカキ」

翻刻に際して、本文は底本のおもかげを残すように努めたが、漢字・異体字はおおむね現行書体に改めた。また、私に句点・読点・「　」括弧等を記し、改行も加えて読解の便宜をはかったが、煩瑣になるので（ママ）は記さなかった。なお、下冊部分には綴じ違えによる乱丁があるが、翻刻では、それを正した。また、やはり下冊部分にある二丁の欠丁は、「獣太平記」（『室町時代物語大成』四）で補い、（　）括弧に入れて掲出した。

最後に、本書の翻刻掲載の許可を賜った慶応義塾図書館に厚く御礼申し上げたい。

十二類歌合之草子

［上］

それ、諸仏ほさつのほんせい、まち〳〵なりといへとも、さうほうてんしのりやく、ことにすくれましますは、やくしによらいのひくはんなるへし。しゆひやうしつしよ、しん〳〵あんらくと、ちかひ給ふにより、そくせうむしやう、正とうほたいのせつにいたるまて、十二大くはん、しかしなから、けんせ、たう生をかねて、衆生をさいとし、十二神しやう、ちうや、しこくをりやうして、我らを、おうこし給ふ事、かたしけなしと、申もをろか也。

こゝに、いつれの世にかありけん、ころは、三五のりやうしんに、十二神しやうのししや共、あつまりこそりて、あそひたはふれつゝ、「此くにの、ふうそくなれは、いさや、歌よみ侍らん」とて、ちうやを左右にわかちて、歌合のため、月をたいにて、えいし侍ける所へ、しか一かしら、たぬきをともにめしくして、きたりつゝ、「御歌合の御くわいと聞ゆ。ちやうもんのために、すいさんせり。かつは、判者なくてはむねん也。かたのことく、鹿仙の一分にて侍れは、はんしやし申へし」と申けれは、をの〳〵みき、ことのほかなるこゝちして、「とやせまし、かくやせん」と、あひきするところに、夜一はんのいぬ、はしりいてゝ、とかめけるは、「われらは、やくしのけんそくとして、十二ときをかたとれり。御へんたち、いなひ野よりのともから、此席にのそむへきにあらす。たしかに、かへり給へ」と、あらゝかにのゝしりて、すくに、とひかゝらんとしけるに、鹿もあふなくみえけるを、ひるの第一はんのたつ、なためて、判者をゆるしつゝ、「つまこひの御なくさみにし給へ」と申けれは、鹿、よろこひて、座につきとゝのひぬ。

判者　鹿

［挿絵・第一図・欠］

一番　左　　辰

あまつ空うきたつ雲もこゝろして月をはさらぬよとのむら雨

右　　戌

里のいぬ月みる秋の夜半たにもほしまほるとや人の思はん

判に云、左の歌、月のため、うき雨を心にまかせ侍らん。あらまほしくや。

右歌、星まほるかとあやまたれんこと、むねんに聞ゆ。されは、左勝と申へし。

二番　左　　巳

月みれはうさもわするゝ秋の夜をかなしみおもふひとや成らん

右　亥

くさまくらふすゐの床の山かせに雲もさはらぬ月をみるかな

判に云、左の歌、月を見て、うさをわすれ、秋の夜をなかしと思ひて、あかし侍らん。いとやさし。

右の歌、とこの山風に、雲もさはらぬ月をみん心もわりなし。されは、何れも分かたく聞ゆ。持とや申へき。

三番　左　午

あふさかや関のこなたにまちいてゝよはにすみぬるもち月の駒

右　子

夜もすから秋のみそらをなかむれは月のねすみと身は成ぬへし

判に云、もち月の駒、月のねすみ、ともにゆへありて、せうふわきかたし。これも持とや申へき。

四番　左　未

めくりきて月みる秋に又なりぬこれやひつしのあゆみ成らん

右　丑

むら雲のそらさたまらぬ月を見てよはのしくれをうしとこそ思へ

判にいはく、左の歌、月みる秋をむかへては、まつ、これをもてなすへきに、ひつしのあゆみ、世にいとはしく聞ゆる心ちしておほゆ。

右の歌、月を見て、夜半の時雨をかなしむ心、まことにやさし。われもぬれて、ひとり鳴てこそ侍しか。右をかちとや申へからん。

五番　左　申

月をのみさやまおろしはしくるとも空くもらさる秋の夜もかな

右　寅

みるまゝになみた露ちる月にしもとらふす野への秋かせのこゑ

判に云、左の歌、山かせはしくるゝとも、月なくもりそと、かなしみ給、おもひやられて聞ゆ。

右歌、とらふす野へのと侍れは、月をみてもふしけん心、いかゝとおほゆる。されは、左をかちと申へし。

六番　左　酉

つれなしとゆふつけとりもなくたひにかけほのめかすあり明の月

右　卯

あけかたの月のひかりのしろうさきみゝにもたかき松風のこゑ

判に云、左の歌、つれなく待わひて、かけほのめく在明の月、めつらしく覚ゆ。

右歌、松かせみゝにたかき、きゝにくゝや。されは、左をかちと申へき。

和歌の会、はてぬれは、「をの〳〵、判者をもてなすへし」とて、めん〳〵に、めつらしきさかな、一しゆつゝもとめて、さかもりし、らんふ、えんねんにをよひけり。鹿は、しきたいして、なこりおしみなから、「山ちはるかに侍れは」とて、たちかへりぬ。

［挿絵・第二図・欠］

そのゝち、両三日をへて、ありし名こりのわすれかたさに、をの〳〵、又、くわいかうして、もみちの山のふもとを、くわい所にかまへ、かさねて、判者をしやうしけれは、鹿、思ひけ

るは、「かやうの所へ、二たひのそむ事、古人のいましめなれは」と、しんしやくして、心はすゝめとも、「このたひは、まいりたく候に、おりふし、かせのき」と申て、つかひをかへしけれは、まへにともしたりしたぬき、しかのもてなされしを、あなかちに、うらやましく思ひて、「われも、なとか判者にならさらん」とて、心はかりは出たちて、すいさんしたりけれは、鹿をこそをそしと、おもひつるところに、かゝる下らう、いてい、ふしきなるすかたにて、やかて、よこ座に、はゝかるところなく、ゐなをりて、しゆ〳〵のくわこんとも、申けれは、十二るい、大きにいかりて、いかりて、せひなくおひ出し、さん〳〵のちしよくにをよひけり。狸は、とかくして、命はかりいきて、からきめみてかへりぬ。鹿まつ所のたぬきは、これより申とかや。

［挿絵・第三図・欠］

たぬき、からきいのち、いきて、つかにかくれて、いきつきゐたりけるか、此こゝろうさを思ふに いかにもして はちすゝかて、さて、あるへきにあらすと思ひて、よろつのきんしうをかたらひつゝ、一すち、いくさのかまへをそ、いとなみける。みやこには、つはもの、せう〳〵侍れとも、京上も、みちゆかす、たゝ、けのふてをそめ、はなのにかみに文をかきて、しのひ〳〵にこそかたらひけれ。まつ、一もんのかはをそのかみ、いなり山のふるきつね、くまの山のわかくま、れんたい野のおほかみ、あたこの山のふるとひ、ゆるきのもりのしらさき、二日市はのむらからす、あくをこのむふくろふなとゝ、同心しける。さふらひ大将には、ねこ、てん、いたち、ねすみ はむ鳥、みゝつくなとも候ひけり。そのせいは、三百よき、つかのしやうにたてこもり、をの〳〵、きせい、ひやうちやう、とり〳〵なり。その中に、はやりのおほかみ、すゝみ出て申けるは、「かやうの事、かつにのるにはしかす。この月の、むなしくくれぬるこそ、ほいなけれ。さりなから、九月一日は、しやくにちなれは、二日のいぬのをはりほとに、をしよせて、夜うちにせん」と申けれは、みな〳〵、このきにそとうしける。

［挿絵・第四図・欠］

さるほとに、こくないつうけのことなれは、十二るい、このよしをつたへきゝて、「やすからぬ事也。たぬきほとのやつはらを、かたきにうけて、よせられたらんは、いひかひなし。いさや、さかよせよ。こなたよりをしよせん」ときして、「時をうつすへからす」とて、やかて、出立、をの〳〵、わかはうはい、そのほか、ひんきのもの共、おほくあひかたらひて、同八月三十日、うちあかしに、五百よきのせいにて、かれらか、こもりゐたるところの、さかひのしやうへそ、をしよせける。たぬき、思ひのほかの心ちして、あはてさはきけれとも、かたらふところのともから、さすかに、はちあるつはものなれは、すこしもさはかす、さかも木引、やたはねときて、よせてのすゝむをそ、待かけたる。

まつ一はんに、庭鳥、時をつくりけれは、しろにも、ときをあはせける。矢合せしてのち、両方の矢のしけき事、雨のことし。いくさよはひは、雷ににたり。矢をひゝかし、ちをうこかす。時をうつせとも、せうふは、さら〳〵みえさりけり。よせてのかたより、ねすみ、いむけの袖の、かふりのいたをくはへ、

しころをかたふけて、はしり出たりければは、しろのうちより、ねこ、出あひて、おつかけけるを、いぬ、へたゝりて、ねこをは、しろへそ、おひ入ける。そのとき、おほかみ、もとより、はやりおのむしやなれは、いぬとくまんと、はせいつるを、よせてのとら、おちあひて、おほかみをはうちとりぬ。しろの内には、むねと、たのみ思ひけるおほかみ、うたれぬれは、心ほそくそおほえける。やくそくのきつねは、もとより、はけ〳〵しき心ちにて、「こん〳〵」とは、ちきりなから、その日はみえす。一方に、たのみつるとひは、てんくしきものにて、かへりちうしてとひうせぬ。よせては、かつにのつて、せめけれは、うたるゝもの、かすをしらす。一ちん、やふれぬれは、さんたう、まつたき事なくして、をの〳〵、みな、ちり〳〵にそ、おちうせにける。

［挿絵・第五図・欠］

十二るいのともからは、たゝかひに、うちかつといへとも、けうとの長ほんたるたぬきを、おひにかしてけれは、すこふるいこんをなして、日、すてに、くれにをよひけれは、こよひは、のしゆくをとりて、いきをやすめ、明たん、うちあかしに、かさねて、きんへんのつかあなのうろを、さかしもとむへきよし、ひやうちやうす。

たぬきは、くわいけいのはちを、きよむるまてこそなからめ、いくさにまけて、めんほくをうしなひけれは、すかたをやつし、せんちやうをのかれて、つめのしやうとたのむ所の、木のうつろに、はひいりて、いきつきゐたりけるか、いかにもして、今一と、はちあるせうふをして、うちしにをせはやと、思ひけれ共、かたらふつはものゝ中に、むねとたのむ所のおほかみ、うたれて、よせいも、みな、ちり〳〵におちうせぬれは、たのむかたなき身ひとつに、いかにすへしともおほへさりけり。

あたこの太郎のこうけん、ふるとひは、しはらく、せんちやうに、かけりまひけれ共、いくさ、たのみなくみえけれは、ひよろりうたひて、いたりけるか、ししうのやう、さすか、おほつかなくやありけん、しろちかきもりのこすゑに、はをやすめ、とをめつかひてゐたりけるに、たぬき、いくさにまけて、はう〳〵、もりの下なる木のうつろに、ゐたるを見て、いそき、とひわたりて、「さても、いかに」と、たつぬれは、ことのやう、かたりて、「今は、かくて、いのちいきてかひなし。此うへの事、いかゝすへき」と、申あひけり。

［挿絵・第六図・欠］

ふるとひかいふやう、「かせんはにて、申つるやうに、十二るいのともからは、むかしより、さすかに、しかんもつの名をえたることゝは、誰かしらぬに、さるへきようかいなとをも、かまへられす。いぬはかりを、ひとり、かたきにせられし時たにも、よはきをみて、にけこもるをこそ、せんとゝせられし。つかのしろをたのみて、大しのかたきともを、こゝにしてまたれける事、たんりよのいたす所也。ふんないひろき所こそ、かたきのよはめを見ては、かけ出ておつちらし、かたきてこはき時は、引いりて、いきをやすめなとして、しゝう、りをうる事なるに、ふんないせはきつかあなに、かけ引のしんたいも、心にまかせぬゆへに、おほくのゆうしを、うちしにさする事は、しかしなから、うんめいの、しからしむるゆへかとおほゆれは、

きやうかうとても、さふらひすくなく侍れとも、かくて、さて、やみなん。御へん、一人のいこんにあらす。同心すはいのちしよくなり。それにつきて、いさゝか、みかたのかううんとおほゆる事は、十二るいのともから、明たん、かさねて、御へんのさいしよを、たつねもとめんとて、こよひ、のしゆくをとりて侍る也。さためて、いくさにかちほこりて、大しゆのみて、えいふしたるらんとおほゆ。こんはん、かののしゆくを、夜うちにせんに、なとか、むねとのつはもの、少うたさらん。くつきやうのやつはら、一両人も、うち取なは、そのゝち、太郎坊にあんない申て、あたこのみねに、うちあかりて、くつれさかをほりきりて、たてこもりなは、十二るいの人〳〵も、いかてか、たやすくおとすへき。かつせんのならひ、一人、きをそんすといへとも、よせい、こゝろ、まち〳〵なれは、そうにひかれて、たいさんする事、ちからなきしたいなり。わか身をもて、をしはかるに、残りの人〳〵も、ひたすらに、こゝろさしをへんするには、よもあらし。御へんのあんひ、きゝさためんと、きんへんに、うかかふたくひも侍らん。このへんうちめくりて、もよほしあつむへし。夜うちの人しゆ、おほくては、なか〳〵としうちして、あしき事なり。くつきやうのものとも、ようしんたにあらは、はちあるかたき、なとか、うつとらさらん。夜ふけぬさきに、いそきもよほすへし」とて、やかて、とひさりぬ。

[下]

さるほとに、ふるとひ、さんしのほとに、とひめくりて、しかるへきところに、ふれまはしけれは、あんのことく、「このき、もつとも〳〵、しかるへし」とて、あひともなふともから、あまた、いてきたる。まみのこんのかみは、たはらのおくにかへるとて、こはた山を、かちよりこえてけるに、おひつきて、かくと申けれは、すなはち、あひともなふ。いなり山のふるきつねは、かへりさかより、たちかへる。くまの山のわかくまは、ほんさんは、みちもはるかなれはとて、しはらく、今くまのへんにやすらひけるも、この事きひて、とうしんす。おほかみかちやくし、のいぬの太郎、ちゝかかはねをとりて、けうやうせんとて、いとなみけるか、れんたいのは、ほともとをし。さんまいは、いつくもおなしことなれはとて、えんねんしへ、をくらんとしける所へ、つけけれは、おやのかたきに、二たひあはん事をよろこひて、さうれいをさしをきて、三所へそうち出ける。そのほか、二もとのすきより、おひそたちて、いかなるものをも、てつかみにせんとおもひたる、わし太郎も、此たひ、はしめてあひともなふ。しなのゝくにの住人、さらしな山のたか太郎は、きんやのはんをつとめんとて、折ふし、在京したるに、ふるとひか、やしなひみなりけれは、「かゝる事こそ候へ。見つき給へかし」と申けれは、もとより、はやりのわかむしやなれは、せひなく、うち出て、まつさきかけてそ、すゝみける。そのほかのゆふし、かれこれ、三十よかしら、あひともなひて、しよやのかねよりさきに、もりのへんにあつまりて、木のうつろより、たぬき出たるに、此よし申けれは、よろこふこと、かきりなし。よせい少々まちくして、やはんはかりに、かの野宿にそ、をしよせたる。十二るいのともからは、ひねもすのいくさにくたひれて、をの〳〵、ものゝくくつろけて、きうそくす。

上こは、しよくし過て、まつ、さけをのみて、えひふしたり。夜うちのしたく、思ひもよらさりけるに、四方より、手をわかち、三方にゆみやをとりて、よき兵をすゝませ、一方よりは、うつてをそろへ、きつさきをとゝのへて、きつて入。思ひよらぬ事なれは、とるものもとりあへすして、よきもの、あまた、きすをかうふりて、四方へ、たいさんしたりけり。

［挿絵・第一図・欠］

［挿絵・第二図・欠］

たぬきは、夜うちにかちて、いさゝか、はちをすゝきたるおもひをなして、ふるとひにつきて、あたこの太郎坊の、ようかいをこひうけれは、「こんほんの、ゆいしよはしらねとも なんち、ふちをくはゆるうへは、ようかい、いつくにても、心にまかすへし。しやうくはくを、たう山に、かまへさるにおゐては、かたきにうちおとされぬへし。たゝかひの時は、かねて申へし。せいをもよほし、かうりよくすへき也」とそ、おほせられける。

十二るいのかたには、野しゆくの夜うちに、しかるへきとも、ともから、あまた、きすをかうふりぬれは、やすからぬことにおもひて、かさねて、せいをもよほして、あたこのしやうへ、よすへきよし、きしけるか、「せんとは、かたきも、こせいなり。しろも、ひらちなりしかはこそ、ひるのいくさにかちたりしか、此たひは、しやうも、くはうはくなり。太郎坊、よりきすなれは、さためて、まうせいなるへし。さうなく、よせてもいかゝ」なと、はつさのひつし、申れは、その中の上しゆ、たつたゆふ、すゝみ出、申るは、「たとへ、あたこの太郎坊、よりきと申共、我らかゐせいには、いかてかまさるへき。これほとのせうしをは、八大りうわうに、申まてもあるまし。下かいのせうりうはかりを、もよほして、あひむかはんするに、何ものか、たてあふへき。このたひにおゐては、それかしをは、からめてにむけ給へ。たんはちより、からめてへまはり、あたこのみねに、立のほり、しやうくはくを、けやふりて、すて侍らん」と、申けれは、「もつとも、しかるへし」とて、のこるところのつはもの、日をてんして、大てのかたよりせめのほる。

［挿絵・第三図・欠］

（［挿絵・第四図・欠］）

（じやうのかたには、これを聞て、くづれざか、ほりふさぎ、かいだてかきて、まちかけたり。そのかまへ、けんごにして、たやすく、おつべきやうもなかりければ、さうたんより、くれに至るまで、ごかくのいくさにて、せうぶはみえさりけり。やう〳〵、とりのこくにをよびて、とらや、からめてにまはりぬとおぼえて、じやうちう、さはぎあへり。あられに、いくささせ、いかづち、なりまはりて、ほどなく、つめのじやうくわく、けやぶりければ、たのむ所の、太郎ばうが）たうるいも、いかてか、こらふへき。みな、かしこ、こゝの、木の下、いはのはさまに、にけかくれけれは、まして、そのほかのともからは、一やをいるにをよはす、しはすたにへむかつて、おちうせぬ。

［挿絵・第五図・欠］

ちやうほん人のたぬきは、もとのすかたにては、うちとゝめられぬへく、おほえけれは、ほつたいのすかたにはけて、月のわのみたうの、仏たんのしたへそ、にけ入ける。たぬき、いくさに打まけて、二とのちしよくを、せんかたなくこそ思ひけれ。

いかにもして、此はちをすゝかんと、あんしけるか、もとのすかたにては、なをも、かなひかたくおほえて、おにのかたちになりて、かれらを、たふらかし、心まよひせんとき、十二るいるいを、みな、くひてんとおもひて、くろつかにこもりゐて、思ひのまゝに、おにゝになりぬ。しおふせたるこゝちして、十二るい、しゆゑのところ、おもむきける。みちにて、いぬにとかめられて、すてに、あふなく見えけれは、からくして、にけにけり。心うさ、申はかりなし。いぬにたに、みしられぬ。まして、たつ、とらなとは、さこそ、すさましからんすらめと、思ひやられて、此くはたても、むなしくとゝまりぬ。

（［挿絵・第六図・欠］）

（とにかくに、おもしろくもなきことのみ、かさなれば、人めもはづかしくおぼえて、ふかく、あなのそこにかくれゐて、身のありさまを、あんずるに、ゆめまほろしのよの中に、よしなき、がしう、けうまんにほだされて、又、ないりのくはきやうに、かへらん事こそ、むやくなれ。むじやう、てんべんのよは、いかにしてもありなん。「むかしのつかの、かずそひて」とよみける、さいぎやうが歌、思ひしられて、こゝろをとゞむる、あなのすみかとても、ほんらい、三がいくわたく）の中そかし。しこく、たうらいして、ふすへられんときは、はく大きうのくるまも、かたきのかたにあるへけれは、たれかは、もんせんのまうけも、し侍るへき。しかし、へんけしよしうのまよひを、ひるかへして、えんしやう、しつしやうのさとりを、ひらかんにはと、おもひとりて、としころ、すみなれし、つかあな、しよりやうとたのみし、えんりんも、みな、さいしともにゆつりて、心つよく、ほんなふの家をいて、ほたいのみちに入けれは、さいしけんそくも、なこりおしみて、なく〳〵わかれにけり。いとあはれになん。

さて、しゆくもんに、いりなは、いつれのふつけうを、かくしてか、さとりをひらくへきとあんしけり。しんこんのをしへは、しよしうの、さいちやうなれは、このほうをまなひて、三みつのきやうをしゆし、五さうのくはんにちうして、そくしんしやうふつなり。又、ほつけは、せそんしゆつけの、ほんくわい、しゆしやうしやうふつの、ちきたうなれは、此しうにいつて、一念三千の、くわんをこらして、六こんしやう〳〵のくらゐにや、かなはまし。又、ほつさうしうを、うかゝひて、しむみつきやう、ゆかきやうとうに、まなこをさらし、五ちうゆいしきの、はなをもてあそひ、百ほうみやうもんの、月をみかゝまし。又、とすうのきやうをして、さわうこんけん、ゆしゆつの大みね、こんかうとうし、おうけんの、かつらきなと、しゆきやうし、一たらにの、きやうしやとなりて、ちしやのかうへをや、ふまゝしなと、しゆ〳〵にあんしけるか、いかにもしりきのきやうは、しゆしかたく、おほえて、たうこん、まつほうせ、五ちよく、あくせ、ゆいうしやうと、一もんかつう、にうろのをしへこそ、かいふんさうおうの、ほうもんなるへけれと、おもひさためて、ほうねん上人のもんりうに、たつねあひて、しゆつけをとけて、なを、れんせうはうとそ申ける。つゐに、さいけにてはしらさりし、京のほりのほんいをとけ、まみあみた仏たうしやうとかうして、よな〳〵こゝろをすまして、はらつゝみを、ひやうしにうちて、おとり念仏をそ申ける。

［挿絵・第七図・欠］

人さとちかき住ゐも、なを、ほんいならす、おほえけれは、にし山のおくに、さうあんを結ひて、みねの花をたをり、たにのみつをくみて、こせほたいのつとめ、たねんなき中にも、むかしのよしう、なを、すてかたくや覚えけん、月のゆふへ、雪のあした、心をふうそくにそめ、くちにわかを詠して、あかしくらしけり。かのしやもんいゑさとか、うきよをのかれて、てんたいさんに、あそひしとき、五すいをしよきやくし、四まをかうふくせしにも、なを、そのかうせさるは、たゝしきのみなりとこそ、みなもとのしたかふは、かきとゝめ侍しか。わかん、ことなれとも、よしうに、おなし心にこそと、いと、やさしくも侍るかな。